

# Historical Sociologist としての John Millar

—Millar 研究小史と最近の 1 傾向—

大野 精 三 郎

## I 『スコットランド歴史学派』と Millar の地位

18世紀のイギリスで最高の『理論的歴史』(theoretical history)——今日の用語では歴史社会学とよぶべきであろう——を残した John Millar (1735—1801) がふたたび発掘されて本格的な再検討がおこなわれるようになったのは今世紀の 30 年代からであり、とくに注目を浴びたのはこの 50 年代からである。

Millar (1735—1801) は Adam Smith の弟子であり、1761—1801 年のあいだ Glasgow 大学の法学教授であった。この 40 年間にわたって、かれは法学の講義をおこない、すぐれた歴史的・哲学的・政治的思想によって時代に影響をあたえた。1771 年に『階級起源論』を書き、1787 年に『イギリス政治の歴史的考察、アングロ・サクソンの時代からステュアート王朝の成立まで』(*An historical view of the English Government, from the Anglo-Saxon period to the rise of the House of Stuart*) を公刊した。これはかれの死後 1803 年に公刊された 4 巻本のうちの第 1, 2 巻を構成している。第 3 巻は Millar が手稿で遺した 1688 年の革命までの歴史を収め、第 4 巻は、おもにかれの時代に至るまで歴史を書くために集めた材料とみられる断片・小論からなりたっている。80 年代の終りから 90 年代の初めにかけて、London で発刊されている雑誌 *Analytical Review* に書簡の形で、当時スコットランドではきわめて珍らしかった Rockingham Whig の首領 Fox を擁護し、Pitt の対フランス政策を批判したかなり多数の政治論文を寄稿し、のちにこれらの論文をまとめて、1796 年に『クリトの書簡』(*Letters of Crito*) という書名で、無署名で公刊した。

Millar がこれらの書物を書いた時期、18 世紀の後半のイギリス、とくにスコットランドでは多くの歴史的研究がおこなわれた時代であった。D. Hume (1711—1766) を先駆者とし、同時代者 A. Ferguson (1723—1816), A. Smith (1723—1790), W. F. Robertson (1721—1793), Joseph Priestly (1733—1804), G. Steuart (1742—1786), Henry Home (1696—1782) などは Millar をふくめて『スコットランド歴史学派』(scottish historical school) という名称でよばれているほどである。このことは、こ

れらの人々が単に時期的に、同じ時代に歴史研究をおこなったばかりではなく、歴史研究の原理・思想・方法においても共通し、関係があったことを示している。Millar の『階級起源論』が、Adam Smith の 1762—63 年代のグラスゴウ大学の法学講義の発展・完成を企図したものであることは、前世紀末の E. Cannan の Smith の講義の発見・公刊によって明らかになったところであるし、その『イギリス史』が D. Hume の『イギリス史』の反論であることも明らかである。

したがって Millar を理解するためには『スコットランド歴史学派』の特徴と、この学派のなかで Millar の占める地位を明らかにしなければならない。

この学派の基礎は 18 世紀初頭以来のイギリスの経験論の伝統に立脚するものであった。すなわち神学的人間観に代って、現世的な人間をその内在的因果性にしたがって分析しようとした。つまり、Newton が自然界で用いた方法を、人間の事象に適用することにあつた。そして、このことと平行して社会の事実が認識され、研究されたことである。すなわち現世的な人間は、歴史のはじまりから、群居生活を営んでいたからである。このよう事実から人間の行為の動機や道徳的感情や習慣、感覚などを新らしく分析する人間研究が心理学的研究の偏りをみせながらおこなわれた。このような基礎から発展したスコットランドの歴史学派に共通することは、社会および社会的変化は本質的に理性の所産であるとする見解、すなわち社会およびその諸制度は人間の予見や計画の、いわば理性の産物であるとする同じ世紀に支配的であった主知主義または合理主義の見解に反対し、その現世的な人間研究に立脚して社会およびその諸制度は、人間の直接の欲望や目の不便をとりのぞく動きの産物であり、そこには個人や国家によって制御できないそれ自身の発展の法則があると考えた。そしてこのような視角からの社会的産物の——人間の知識が人間の感覚からはじまるという経験論の原理を明らかにするため、言語の起源が探求されたり、人間の欲望や不便をのぞいたりするための社会・政治の諸々の制度の社会的起源の研究がおこなわれた。これがこの学派の第 1 の特徴である。Millar

の『階級起源論』もそうであるし、また A. Smith や Lord Manbodoo (1714—1799) も言語の歴史を書いている。第2に、この社会的発展の全過程と全状況とをそれらを支える要因に分析することによってその進化の法則を明らかにしようとする点にこの学派の特徴があった。Millar の『階級起源論』も階級の経済的・政治的な起源を求めようとするものではなく、Millar 自身も明白に述べているように『人類の自然史』を明らかにすることをその課題としており、社会をその発展の全体性において捉えようとしているかぎり、社会学的であり、その成果は歴史社会学であった。この社会的発展を担う諸要因のうち、主要源泉としての技術的・経済的要因がとくに注目され、強調されたことが、この学派に共通する第3の特徴であった。第4の特徴はこの学派の歴史研究がこのような歴史法則の探求にもとずいて、現在の状況を有効に制御し、人間生活の改善のために諸法則を活用することであった。そのうちとくに、関心は多く政治の問題に集中した。このことは、当時のスコットランド広くはイギリスの政治的状況ないしは危機に根源をもっていた。Millar の書物は、すべてこの問題の解決を目的にしており、かれの意図はその意味で一貫していた。すなわち、一言でいえば、かれは政治形態の変化をおもに経済的变化と対応させて問題としているが、それは18世紀の初頭以来ふたたび擡頭しつつあった王権に対抗して、人民の権利を擁護する自由の問題がかれの関心の根底をなしていたことを示すものにほかならなかった。

したがって、同時代者の D. Steuart がスコットランド歴史学派の方法を特徴づけて、歴史過程をあとづけるのに研究者が推測を用いたため、推測史 (conjectural history) または理論的歴史 (theoretical history) といっているが、そこでの推測または理論の語は、イギリス経験論を指すことはいまや明らかなことであろうし、現代的用語をもってすれば、歴史社会学的方法とよばれるべきものであることも明らかであろう。

この学派のなかで、Millar は技術・経済的要因の概念の「広汎な・体系的展開」(W. C. Lehmann) を示しており、また Millar 研究者の1人である R. L. Meek 教授は「John Millar の書物のなかに、この学派の他の人びとの誰よりも、社会にたいするこの新たらしい見方が最も明白に定式化されており、最も巧みに適用されている」と述べている。

## II Millar 研究小史

ところで最近本格的にはじまった Millar 研究は少くともその前史をもっている。そしてそれが最近の研究の性格のひとつを規定しているので、ふれておかなければ

ならないであろう。Millar の歴史研究が問題とされたのは、Millar を生んだイギリスではなくて、ドイツである。そして問題は Marx と直接的に対比され唯物史観の先行者としてのその占める地位をめぐってである。W. Sulzbach<sup>1)</sup> は、Millar がイギリス革命を技術的経済的基礎のうえで説明したことを高く評価し、唯物史観の重要な先駆者の1人に数えた。これにたいし、H. Cunow<sup>2)</sup> はマルクス社会学の包括的な学史研究において、Millar を軽視している。「Millar は、社会階級という広汎な概念を知っていない。かれは単に地位と身分の区別を知っているにとどまる。たとえば、かれがみずからの書物のいくつかの個所で、富の階級的地位におよぼす影響について語っているにせよ、この階級的区別を、古い図式にしたがって社会の強い成員の弱い成員にたいする肉体的優越に帰しているのである。かれは、階級構成の経済的基礎をみていない」と。W. Sombart<sup>3)</sup> は、Sulzbach の見解を Millar の学説全体に広げ、Millar の業績は「種々の文化領域への唯物史観の完全な適用を示し」、「かれの思想に、19世紀はそれの細論以外になにもつけくわえることはできなかった」という評価にまで高めた。Marx の手稿『ドイツ・イデオロギー』の発刊にあたり、編集者である D. Rjazanow<sup>4)</sup> は序文のなかで、この Sombart の見解を拒け、Cunow の Millar 評価を引用して、Millar を Montesquieu の流れをくむ18世紀後半の無数の文化史家の1人にすぎないと反駁している。Roy Pascal<sup>5)</sup> 教授がはじめて英語文献で Millar 研究の重要性を指摘したが、このばあいにも Sombart の見解を踏襲している。すなわち Pascal 教授は Millar によって代表されるスコットランドの歴史思想の動きと19世紀における Marx, Engels による歴史と政治、経済秩序の弁証法的取りあつかいかたとのあいだにある歴史的関連の重要性を指摘した。したがって Millar 研究においては絶えず Marx の唯物史観との対比が、研究のひとつの性格を規

1) *Die Anfänge der materialistischen Geschichtsauffassung*. 1911, S. 66—70.

2) *Die Marxsche Geschichts-Gesellschafts und Staatstheorie. Grundzüge der Marxschen Soziologie*. Band. 1, 1920.

3) “Die Anfänge der Soziologie”, im *Hauptprobleme der Soziologie*, Erinnerungsgabe für Max Weber, Band 1, 1923.

4) Einführung der Herausgebers im “Aus dem literarischen Nachlass von Marx und Engels”, in *Marx-Engels Archiv*. Band. 1, 1923.

5) “Property and Society: the Scottish Historical School of the Eighteenth Century”, in the *Modern Quarterly*, Vol. 1, No. 2, March 1938.

定しており、研究者は絶えずそれを問題として意識していたように思われる。だが問題はそれにつきない。Millar 研究の本格化とは、このような Marx との対比という問題をたちきって、Millar を 18 世紀後半のスコットランドの歴史学派のなかにおいて、Millar 学説に内在してそれ自身を研究することを指している。そのため Millar の生涯と言動を新らたな資料にもとづいて再構成したり、その政治についての講義要項からかれの政治思想をふたたび再発掘する作業が進んでいる。名著 *Adam Ferguson and the Beginnings of the Modern Sociology*, 1930 で透徹した分析をわが国でも知られている W. C. Lehmann 教授が *John Millar of Glasgow*, 1959. を発刊しているのもこの間の事情のひとつを示すものであろう。資料が未着の現在、わたくしは Millar の歴史社会学をとりあげ、その重要ないくつかの思想の再検討を試みた。Lehmann 教授の論文を第 1 にとりあげる。前著 *Ferguson* 研究のなかで、同時代者のひとりとして Millar の書物を最も注目すべきだと述べ、しかし他方では Sombart の Millar 評価は「誇張であり、無批判的である」と批判しているところから興味深い。次いで Meek 教授の Millar 研究<sup>7)</sup>をとりあげて紹介し、Millar 研究の最近の重要な動向のひとつを伝えたい。とくに Meek 教授の研究は、Millar 研究の意義を、第 1 に、スコットランド歴史社会学が古典派経済学成立の土台となっていること、第 2 に、その歴史社会学のなかの唯物史観と古典派経済学の労働価値論との直接的結合を主張する点において、とくに注目すべきものをふくんでいる。

### III W. C. Lehmann の Millar 研究

Lehmann によれば、Millar の功績は Hume, Ferguson などの先行者たちに比して社会の発展を支える技術的・経済的基礎という概念を広汎かつ体系的に発展させた新らたな問題提起にある。いいかえれば、これらの先行者たちに対比して「Millar において新らしいものは、歴史的観点からみれば、歴史的事実の解釈に、かれが基礎にある諸原理を——たとえ原理はひとつではないにしても適用したその高さであり、かれの歴史が、制度の歴史、文化の歴史としてもつ高さであり、歴史における因果関係を執拗に追求した意味においては理論的歴史としてもつ高さのためである。同じことを理論的に、とくに

社会学的観点からみれば、かれの新らしさは、一方ではかれが君主、自由、財産、風俗、習慣の問題、広く社会問題を、倫理的、または抽象的に解決することより、むしろ歴史的に解決しようとした広さにある。他方では社会・歴史過程において作用する『諸要因』の分析の鮮やかさにある」(p. 38)。

このような社会にたいする分析の新たらしさが、Millar をして先行者たちにみられない社会の現実的な・動態的な機能分析に成功させたと Lehmann はみている。たとえば Millar のつぎの言葉を引用して Millar の社会発展過程のすぐれた分析の証左であるとみている。「社会の諸関連はつねに拡大される。すなわち人間のみずからの状態を改善しようとする内在的な性向から通常うまれる新らたな状態は、つねに新しい統御、法、政治その他の形態を生みだしている。」「商業と製造工業との進歩は 1 国民の風俗と政治状態を変化させる傾向をもっている。新らたな状態のもとでは、粗野な国民には自然であった封建的な諸条件は廃止され、忘れさられ、われわれの古代憲章という尊重すべき遺産のうえに、文明・富裕の王国の精神にもっともふさわしいほかの習慣と規則とがつけくわえられる」と。このような引用から Lehmann は「Millar にあっては社会は、社会的成長という一種の弁証法的变化の過程として捉えられている」(p. 38) という注目すべき見解を述べたあとで、Millar の歴史社会学の内容にたちいて基本的な 3 つの特徴を述べている。

『諸階級の起源』を明らかにすることは、同時に『人類の自然史』を明らかにすることでもあるという Millar の基本的態度は、Millar 特有の社会の把握の仕方、すなわち人間関係をすべて力関係(power-relation)として捉えていることから最もよく理解できる。人間の他の人間にたいする支配または制御の方法・手段の点から、かれの人間社会における力関係の分析には 3 つの面がある。そのひとつは最も単純な・きわめて私的な社会でみられるような個人のあいだでの能力、創造力、権力への野望その他の大きなちがいから生まれる。両性間、主人と召使、さまざまな年齢層間、労働者内部間の関係にあらわれるような人間による他の人間の支配である。この関係における支配は、すべて人間による人間の搾取の形態を必然的にとるわけではなく、また通常、暴力の形態をとるわけでもなく、本質的には力関係、すなわち権威(authority)の関係である。したがって、この関係の性質からいって、階級支配の方法は千差万別である。第 2 には、このような関係が、習慣・便宜、秩序の愛好等々の習慣によって形式化される傾向をもつことである。この関係

6) "John Millar, Historical Sociologist", in the *British Journal of Sociology*, Vol. III, No. I, March 1952.

7) "The Scottish Contribution to Marxist Sociology", in *Democracy and the Labour Movement*, ed. by John Saville, 1954.

による支配は、あらゆる『風俗・慣習』のなかに具体化された形態をとる。第3には、法・法廷の形式的統制、政府の立法・行政行為、または僧侶の支配、宗教上の掟がある。これらは、すべて、千差万別であり、慈恵的支配から自発的服従、または市民の参加による政治から最も苛酷な政治的、軍事的、宗教的圧政までふくまれる。

Millarの階級差別の理論はこのように力関係の総体として人間社会を理解する仕方に密接に結びついている。すなわち人間社会における階級関係が、第1に権威の形態をとっているということから必然的に導かれることだが、Millarは第1に階級の存在を、社会が少しでも分化した段階の「自然的な」側面として捉えている。そして第2に、階級・身分の関係を、おもに力関係、支配と隷属、弱者にたいする強者の支配という観点からみてはいるが、力点はいろいろと異り——あるばあいには、1階級のもつ特権に、他のときには経済関係が強調されるように、——階級の批判的・社会的分析をおこなうまでに至っていない。第3に、階級の差別の起源は、権威の起源の起源が明らかなように、種々の事情があげられ統一的にはなっていない。階級の差別は、軍事能力、宗教的指導力のようにそれぞれの分野における個人間の能力の相違から、家畜・土地またはそのほかの形態での蓄積された富からも生まれる。また、家族の地位および業績、家系、とくに土地相続からも生まれる。また支配そのものまたは弱者の上級者にたいする忠誓からも生まれる。第4に Millarの見解は、社会と時代をことにするにつれ階級差別の種類と程度とはいちじるしくことなるが、ある種の階級区別はどの社会においても不可欠と考えられている。したがって人間社会は力関係であり、権威が支配していることが歴史的であり、自然的であるという Millarの見解からは『階級の差別』も歴史的・自然的であり、階級の存在そのものへの批判や合理論的な基礎のうえで階級を平等化しようとする主張は視野のなかに入っていない。厳密に言えば、それらを拒否することになっているのである。

このように既成の伝統的な階級的差別に深く心理的に捉われた Millarの階級理論の特徴を要約した Lehmannは、Millarの歴史研究の核心をなす社会および社会の変化、社会的・政治的制度を規定する技術的・経済的要因の支配的性質について、いくつかの注目すべき見解を述べている。

第1に、注意しなければならないことは技術的・経済的決定論がかれのもっとも包括的な環境決定論の一部を占めていることである。この要因が、他の基礎的な諸要因——たとえば、生活または生存の諸条件、生計を得るた

めにひとびとの従事する仕事の種類、社会において快適、安全、威信を得るための闘争、名誉と権力を得るための闘争——と相並んで、ひとつの要因をかたちづくつていくことである。しかも、第2に、この技術的・経済的要因というかれの広い概念のなかには少なくともかなり明白に区別されるつぎのような要素をふくんでいることである。すなわち(1)生活適応の基本的諸条件、いいかえれば、人口の大きさ、安全、快適、奢侈、ただ生活のために激しく労働することからの解放に影響する技術的進歩、(2)職業の様式と一般的状態、すなわち仕事の種類とそれが社会のさまざまな成員におよぼす影響、(3)定着の基礎的な型、居住の安定性、社会の大きさ、交通手段および財産形態を左右する技術的進歩、(4)大きくあれ、小さくあれ、人間関係その他が密接であれ疎遠であれとを問わず、社会における土地または他の形態での富に伴う財産の形態それ自体と家系における財産相続の必要性、(5)最底の生活以上への手段としての富の蓄積と分配すなわち富の集中と分散、(6)政治およびその他の権力形態はとくに土地財産に依存するが、副次的には他の形態での富にも依存する。このような要素をふくんではいるが、Lehmannは Millarの技術的・経済的要因が、社会問題の解釈に基本的な観点になっていること、Millarがこの原理を先行者に比して広汎に体系的に発展させたことを認めている。そして最後に、Millarの歴史研究が未来を同じ諸原因の「自然的」な働きに放置するのではなく、これら現実とくに政治制度を意識的に変革する必要を示唆することによって、かれの歴史社会学が本質的には政治社会学であることを指摘している。

#### IV R. L. Meek の Millar 解釈と問題

Millarの技術的・経済的要因が、かれの環境決定論の一部であり、技術的・経済的要因それ自身に多義的な要素をふくむことを明らかにした Lehmannの Millar研究を紹介したあとで、R. L. Meekの Millar研究が、Millarの財産関係=生産関係という一義的な解釈で、Millarの特徴を鮮明に描いていることにおどろくであろう。

Meekは、第1節でわたくしの明らかにしたような『スコットランドの歴史学派』の特徴にふれたあとで、Millarの特徴を、「かれが首尾一貫して基礎的経済的原因が財産関係におきる変化を媒介として権力関係に影響すると前提すると云う」正しい原理を歴史過程に適用したところに求めている。『階級起源論』においては人類の歴史に、この原理を用い、のちの著書『イギリス政治史』においては、イギリスの国家構造の発展を説明するのに用いている。たとえば、この原理にもとづいてイギリスの1640年の市民戦争について、それが本質において階

級闘争であり、—また商業と製造工業の進歩がかれのいわゆる「住民の生活様式と政治状態とをしないでかえてゆく偉大な歴史過程において重要な段階を劃するものである」と指摘し、この同じ原理が、『イギリス政治史』の遺稿として出版された第4巻のなかで、社会が発展するにつれて生活様式、道徳、文学および科学について生じた変化を説明するまで、拡大・適用されていることを明らかにする。そして以上を総括して、「Millar 以前に、このような広汎な社会現象の発展を明らかにするためにかくも首尾一貫して唯物史観を用いたものはなかったのである」(p. 92)と結論づけている。

このように Millar の歴史社会学を一義的に唯物史観と把握する Meek は、他方では、正当にも Millar の弱点をつぎのように指摘している。「Millar の弱点は、——と Meek はいう——とくに労働者と資本家とのあいだの経済関係の分析においてあらわれている。A. Smith を踏襲して、Millar は商業国民の全財産および住民の生活資料は、3つの源泉、すなわち土地(または用水)の地代、ストックすなわち資本の利潤、労働賃銀からひきだされるということを認識していた。また、全く財産をもたない労働者は、かれの日々の労働によって辛うじて生活資料をうるだけで、みじめな状態におかれていることを認識した。しかしかれは、労働者と資本家とのあいだの関係が本質的に搾取関係であるとみることを拒否した。反対にかれは今日 Lauderdale をその創始者とみなしている利潤「生産力説」を採用して、その関係の搾取の基礎を有効におおいかくしてしまい、この点においては、A. Smith から1歩後退しているのである」(p. 95)。

このようにみられた Millar の理論は、Meek をして Marx との対比に導いてゆく。しかし、この点において Meek は、Millar における唯物史観の一義的な解釈とは反対に、また Sombart, Pascal, ある意味では Lehmann ともちがって、Millar と Marx とのあいだの類似を強調することを警戒している。Meek は、その相異の第1に、弁証法の問題をあげ、「Marx の歴史観のなかには豊富な内容と社会的変化の弁証法についての感覚があり、それらはしばしば Millar には欠けていた」と指摘している。第2に Meek の注目した相異は、かれらの社会階級のとりあつかいかたである。「Millar はたしかに近代社会における諸階級の存在に気づいていたし、またそれら階級の闘争の歴史的発展の『経済学的解剖』という観点から述べることに優れていたが、しかし Millar は階級それ自身の存在を、あらゆる近代社会の自然的かつ不可避の様相以外のなにもものかであると一度でもみなした形跡もないのである。他方 Marx は「階級の存在は

生産の発展における特定の歴史的階段と結びついているにすぎないこと、また階級はいつかは消滅することを信じていた。」

だが、以上の2点において限界をもつ歴史社会学は、その制約のなかでイギリス古典派政治経済学と「微妙かつ重要な関係」があると指摘する点で、Meek の研究は新たな問題提起をふくんでいる。「第1に、——と Meek はこの関連について述べている——古典社会学における生活の物質的条件に重点をおく市民社会の概念は当然、Marx がのちに述べるようになるように市民社会の解剖学は政治経済学に求めらるべきであるという信念をとめない、古典派政治経済学の成立を促したということである」。この指摘は正しい。だが注目すべきことは、第2に、古典社会学の興隆が、生みだされた政治経済学の方法と形態とを決定したこと、一言でいえば唯物史観と労働価値論との直接的結合を主張する Meek の提言である。これは経済学の社会学化を主張する Meek の問題提起の核心をなしている。「古典社会学の市民社会観は、その体系がそこから出発する価値論の性格を決定するのにやくだつであろう。ここでの要点は、価値論は単純に、バターとチーズとの相対価格が、あるあたえられたときに、なぜそれだけであるかということの技術的な説明ではないということである。価値論は通常、当該の経済学者が経済過程全体の説明に有益だと判断した一種の因果性原則を体現化しているのである。……そうしてこの視角は通常、一般化された形としては、価値論に表現され、かれはこの価値論をもって経済学の研究をはじめであろう。たとえば、経済学者が、古典社会学のあいだでは多少とも共通であった社会的因果関係についての特定の理論をもってはじめると想定しよう。かれはそうすると、生産における人間と人間との関係を、その他のすべての社会的・経済的諸関係の、ことばのある重要な意味における基礎だとみる習慣をもつであろう。こうして商品交換者としての人間のあいだに存在する諸関係を考察するにいたると、かれはおそらく、この関係の背後に、他の一層根本的な商品生産者としての人間のあいだの関係がひそんでいるのではないかと思う。わたくしは思うのだが、かれはおそらく労働価値論のほうに導かれるであろう。……つまり労働価値論は、経済過程は生産者としての人間のあいだの社会関係という点から研究されるのが最も有益であるという見解の、一般化された表現なのである。いいかえれば、それは古典社会学の基礎にあるのおなじ種類の態度の表現なのである。……わたくしは、この結びつきが存在するし、重要なものであると、きわめて強く感ずる。唯物論的歴史観と労働価値論との結合が、

古典政治経済学において偶然ではなかったのは、マルクス政治経済学においてそうでなかったのと同様である。」

#### VI 結びに代えて

私は最近の Millar 研究の重要な動向のひとつを紹介的にあつづけた。Lehmann の研究は Millar に内在して、Millar の歴史社会学の内容をいろいろの要素にまで分解することによっていくつかの重要な示唆をあたえているように思われる。とくに注目すべきことは、Lehmann が Sombart と Cunow によって代表される相対立する二つの Millar 解釈のいずれにも偏しないで、Millar に内在して、Millar の統一的理解への道を開いたように思われる。具体的には、Lehmann が Millar の階級論の基礎を、Sombart のように経済的基礎として一義的に規定されているものとしてでもなければ、また Cunow のように統一のない雑多な要因のよせ集めとしてでもなく Millar の人間社会の把握の独自性から生じていること、いわば法社会的に人間関係を力関係で捉え、そこでは権威の関係が基本的であることから統一的に理解することができることを、明らかにした点で、優れているように思われる。しかしそれが社会の進歩を決定する技術的・経済的要因といかに結びついているか。

総じて社会発展の過程のなかで、それぞれの要因をどのように位置づけているかという問題は今後に残された問題としても、Lehmann が Millar の社会発展の理論は一種の弁証法的理論であるというのは飛躍にすぎるように思われる。

これにたいして Meek の Millar 解釈はかなり一面的で、Millar の特徴を明確にすることにおかれている。しかしそのことは、かれの問題提起、すなわち古典社会学と古典政治経済学との関連を重要視することから来るのであろう。古典社会学と古典政治経済学の関連を強調したことは、Meek の大きな功績であるが、しかし古典社会学の唯物史観が古典政治経済学における価値論の方法と形態とを決定したという Meek の主張は、一面的、図式的であるように思われる。このことは、古典社会学のなかで最も明白に唯物史観を完成した Millar 自身が労働価値論を否定しているところからも明らかではないであろうか。そしてこのことは Millar が財産の所有関係を必らずしも明確に生産関係として捉えていないこと、総じて Meek の命題を具体化するためには Millar の唯物史観といわれるものの内容をさらにたちいって検討することからはじめられねばならないように思われる。